

「英語授業を創る『タスク』の発想」

司会者： 早瀬 光秋（三重大学）
古家 貴雄（山梨大学）
パネリスト： 松村 昌紀（名城大学） コーディネータ兼パネリスト
赤池 秀代（浦和明の星女子中学・高等学校）
新谷 奈津子（National Institute of Education, Singapore）

① 教室における自由で自然な言語使用の役割とその実現のための条件

松村昌紀（名城大学）

タスクは教室に自由で自然な言語使用場面を作り出すための「装置」であり、タスク中心の言語指導（task-based language teaching）とはそうしたタスクの潜在的な力がどのような授業展開の中で最もうまく引き出されるかについての提案である。「学習者が第二言語の使用者として機能できるようになる」という今日的な言語教育の目的に照らして考えるとき、現代の言語教育をタスクという言葉や概念を排して考えることはむしろ難しい。

タスクに取り組む学習者の中のやり取りには、言語発達の契機となるさまざまな特徴——例えば、共感的回復、学習者相互の足場組み、自己修正や言語的問題の協働的解決、言語使用の「ゆらぎ」など——が現れる。多くの要素が影響を与え合うネットワーク・システムの形成として言語の発達過程を捉えるなら、そうした場の重要性は十分認識されなければならない。そのため私たちは「学習者が目標の語彙や文法項目を理解した後、応用段階においてそれを『材料』とした言語使用に臨む」とする言語学習観を問い直してみる必要に迫られることになる。そうした発想は言語習得に関して明らかにされてきた種々の事実と相容れないばかりか、指導者の側に正確ではあっても限定的な言語使用を是とする態度が形成される要因ともなるからである。

どの段階の学習者がどのような言語的環境にある場合でも、指導がどのような教材を用いて行われるとしても、変化する状況・文脈に対応可能な言語運用能力の養成を目指すのであれば、教室に自由で自然な言語使用の場面を作り出していくことが考えられなければならない。そこに現れる学習者の誤りを含んだ発話を許容しつつ、その発達を支援していくため、私たちには言語の使用と発達、学習と指導に関する認識の「タスク的転回」が求められていると言えるかもしれない。

② 英語授業を創る『タスク』の発想

赤池秀代（浦和明の星女子中学・高等学校）

「英語の授業は英語で」という掛け声のもと、中学・高校の現場では様々な努力が行われている。でも、実際に全国津々浦々で授業が大きくかわっているか、というと残念ながらそれほどでもないと言わざるを得ない。この現状において、タスク活動はどう扱われているだろうか。タスクが語学学習に必要なとわかっていても、なかなか授業に取り入れられないのが現状だ。できない理由はすぐに集まる。①文法・語彙をある程度頭に置いてからでないと無理、②検定教科書をこなすので精一杯、③教科書は文法・機能シラバスになっている、④大学入試を考えるとそんな余裕はない、⑤同僚は文法訳読式の授業をやっている。自分だけタスク活動など無理無理、などなど。でも、本当に効果があるなら、どんな制約があってもやらなくてはならない。完璧なタスクでなくても、数少なくても。中学・高校の現場の様子と、タスク活動を組み入れる努力をお話したい。

③ Task-based language teaching in Japan: Problems and possibilities

新谷奈津子 (National Institute of Education, Singapore)

In this talk, I will explore a number of issues and possibilities relating to the implementation of task-based language teaching (TBLT) in Japan. Drawing on second language acquisition theories, I will seek for answers to questions such as What are the benefits of using tasks in English classroom?; Is it possible to incorporate tasks into the existing syllabus?; How can we assess the outcome of the TBLT?; and What are the roles of teachers in TBLT?

I will first examine the goal of TBLT by contrasting it with the goal of present-practice-produce (PPP) where grammar explanation is given followed by production practice activities. I will draw on research that has investigated the relationship between implicit/ explicit learning and implicit/ explicit knowledge to argue that is better able to develop students' communicative skills. I will then examine two major issues surrounding TBLT in Japan: institutional issues and teacher issues. Institutional issues include the existing linguistic syllabuses, the examination system, and the large, teacher-centred classroom. Teacher issues include teachers' knowledge and skills and their willingness to innovate in teaching. I will conclude with some suggestions for implementing TBLT in the English classroom in Japan.